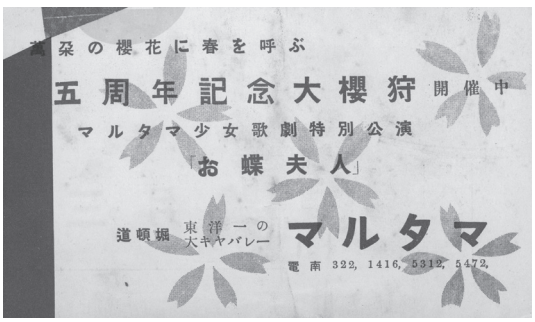
おおさか KEY わーど 第58回

《大阪ホフマン物語》というのはいかが

浅草だけではないオペラの町

道頓堀開削400年を考えていたら、東京の“浅草オペラ”のような、“道頓堀オペラ”というのがあったか考えてしまった。“浅草オペラ”は大正5（1916）年にはじまったとされ、文学者の愛好者や、“オペラ好きのごろつき”の意味で「ペラゴロ」と呼ばれる熱狂的なファンがいたことも有名だ。

しかし芝居町である道頓堀も歌劇と縁が深い。文楽、歌舞伎も和製のオペラみたいなものだし、近代では、松竹座に現在のＯＳＫ日本歌劇団につながる松竹の少女歌劇があったり、「マルタマ」などキャバレーも自前の小歌劇団を組織していた。名テノール藤原義江（1899～1976）が歌手を志したのも道頓堀だった。新国劇の役者だった彼は、道頓堀の弁天座で田谷力三の歌を聞いて歌手に転向する。



昭和初期のキャバレー「マルタマ」の案内にもプッチーニの「お蝶夫人」

“道頓堀ジャズ”という言葉が知られるようになったが、“道頓堀オペラ”もあってもよかった気がしてきた。

そもそも大阪とオペラだが、実はわが“オオサカ”は有名なオペラに登場している。イタリア歌劇の《イリス》（1898年初演）である。作曲者のマスカーニ（1863～1945）を知らなくても、映画《ゴッドファーザー》に用いられた《カヴァレリア・ルスティカーナ》の間奏曲をご存じの方は多いだろう。

《イリス》の舞台は吉原の遊郭で、金の亡者“キョウト”の手筈で、薄幸の少女イリスに迫る若旦那の名前が、なんと“オオサカ”である。

“オオサカ”役は声をつぶす、とイタリアの大歌手から藤原義江が忠告されたほど知られた作品であり、歌劇史に“オオサカ”の名が刻まれていることは誇るべきことである。しかし、金満の放蕩息子を“オオサカ”と名付けたのは誰か、ぼやきたくなるのも事実だ。

そこで名作オペラを大阪を舞台にした内容に翻案し、開削400年記念の道頓堀で上演して名誉挽回、わが町の名を世界に発信したらという作戦はどうだろう。私が目をつけるのが、“シャンゼリゼのモーツァルト”の異名をとり、《天国と地獄》のカンカン踊りで知られるオッフェンバック（1819～1880）の《ホフマン物語》（没後1881年初演）である。

戦前のロマンチックな「ホフマンの船唄」の楽譜

原作のストーリーはこうだ。主人公の詩人ホフマンは、3人の女性に熱い恋をする。精巧に作られた歌う人形のオランピア、病気にむしばまれ、歌うと絶命する歌手のアントーニア、男の魂のみならず、鏡に映る影まで奪い尽くすヴェネチアの娼婦ジュリエッタの3人で、ホフマンはすべてに失恋して絶望するが、芸術の女神ミューズに救われるという物語である。

大阪におきかえれば、人形のオランピアは、アニメの巨大フィギュアが店頭を飾る日本橋筋の物語、歌手アントーニアは、心斎橋筋の夜のストリート・ミュージシャンやカラオケの物語、ジュリエッタは、名高き「ホフマンの舟歌」が流れるなか、ネオン瞬く道頓堀をヴェネチアの運河に見立てて、ゴンドラで船乗り込みする物語となる。舞台はすべてミナミでドンピシャリ。題して《大阪ホフマン物語－オッフェンバックのオペラによる》はいかが。

まあ実現は難しいだろうが、夕闇せまる道頓堀で巨大なカニの看板を見上げ、ヴァーグナーの壮大な楽劇《神々の黄昏》をもじった《蟹々の黄昏》というオペラもどないだ？ と思いつくのは、ダジャレのミューズにとりつかれた私の不幸でしょうね。ジャジャーン♪、さあ序曲がはじまった…。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。